広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Mussetの戯曲における登場人物《fantoche》についての一考察
Auther(s)	小笠原，洋子
Citation	フランス文学 , 10・11 : 22 - 30
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040896
Right	
Relation	

Musset の戯曲における登場人物 ≪fantoche≫ についての一考察

小笠原　洋　子

※

周知の如く，魂に深く浪漫主義の刻印を受けていた Musset の戯曲は，浪漫主義の香気のすこぶる高いものであるが，私達はそこに，Hugo 一派の正統浪漫主義の正劇 ≪drame≫ とは別個の演劇美学を認めることができるのである．すなわち，そこに，私達はある特異な香気を感知し得るのである．その要因として，本質的には，Musset の génie が考えられなくてはならないであろう．つまり，人間の本質あるいは愛の本質を把握し得る優れた直感力という彼の持つ génie は，人間のあるいは愛の存在の源泉そのものを極めて繊細に描くことができたのである．また副次的には，Musset の戯曲がもっぱら読者のみを対象として書かれたという特異性が挙げられるであろう．つまり，1830年，オデオン座における La Nuit Vénitienne の上演の惨憺たる失敗の後，彼は自分を理解してくれない観客に絶望し，その後劇場に足を運ばず，彼の戯曲を Un spectacle dans un fauteuil と名付け，上演を考慮しないで書いたため，物質的なあらゆる障害から，またあらゆる伝統から全く解放されて，自由奔放なイマジネーションの，彼独特のファンタジーの正に正当な場を得たのである．この読者のみを対象とした戯曲においては，彼の génie が存分に発揮せしめられ，極めて詩的香気の高いものとなり得たのであった．この傾向は，彼の生涯において最もロマンティックで最もメランコリックな時期（1833年及び1834年）の作品において特に著しい．

ところで，私達はこのような Musset の最も詩的香気の高い戯曲，メランコリックで情熱的な戯曲においてのみ ≪fantoche≫ と呼ぶに値する端役の登場人物を見出すのである．≪fantoche≫ とは，イタリア語の ≪fantoccio≫ に語源を持つ言葉で，もともと糸の助けで動く関節のある「操り人形」≪marionette≫ に類するものであり，Musset の喜劇においてこの操り人形の糸を引くのは，儀礼とか慣例，あるいは外見とか本能とかという極めて人工的でメカニックなものなのである．ここで，私達は Musset の戯曲において極めて対照的な二つのグループの登場人物を持つのである．一方は，感受性，知性，才気に恵まれた登場人物であり，他方は，通俗的で，偏狭な馬鹿げた存在である．前者は Musset が愛し，尊敬した劇の主人公達であり，後者は彼が軽蔑し，遠ざかろうとする滑稽な操り人形的な登場人物 ≪fantoche≫ である．したがって，この端役の ≪fantoche≫ は，Musset の本質をなす「感情の論理[註1)]」は皆無であり，主人公達の世界とまた Musset の希求する世界と全く相容れないものなのである．Musset の持つ愛に対する直観力は彼の尊い génie であり，ロマン派において特に卓越せる彼の本質であるとの前提のもとで，こうした ≪fantoche≫ を敢えてここで取り上げる理由は，前述の如く，最も詩的香気の高い劇

に，この極めて低俗で思慮感情のない存在である ≪fantoche≫ を Musset が好んで取り入れているということ．また，Musset が ≪fantoche≫ を彼の劇に登場させた時期は，Musset 自身の生涯においても最もロマンティックな時期 ——1833年と1834年—— であったということ．以上２つの理由からであり，そこに副次的な本質を見い出すことができるのではないかと考えるからである．また ≪fantoche≫ の不合理，馬鹿らしさを示すある文体をもって実に巧みに ≪fantoche≫ を書き上げているということ，それは，Musset の本質である主人公達の才気溢れた繊細で情熱的な感情を示す文体 poésie-dialogue と共に，フランス演劇史でも Musset 独特の演劇美学を持ち得るものであるということ．以上の理由から，Musset の本質を考察する間接的な手段であるが，重要な手段として，以下 ≪fantoche≫ を把握することを試みたいと思うのである．

※ ※ ※

Musset の戯曲の中で，厳密に言って ≪fantoche≫ と呼ぶことのできる登場人物が現われる時期は極めて短いし，その作品の数も極めて少ない．すなわち，1833年と1834年の作品 A quoi rêvent les jeunes filles, Les Caprices de Marianne, Fantasio, On ne bdaine pas avec l'amour の四編に特に集中されている．すなわち，A quoi rêvent les jeunes filles で ≪fantoche≫ として振舞うのは，Irus と彼の2人の下男 Spadille と Quinola であり，Les Caprices de Marianne では，Claudio と彼の下男 Tibia であり，Fantasio では Mantoue の王子と彼の副官 Marinonni であり，On ne badine pas avec l'amour では男爵と司祭 Bridaine, 教育係 Blazius と Pluche 女史とである．すなわち，これら ≪fantoche≫ は，一方では，王であり，夫でありあるいは父であるという支配者側の ≪fantoche≫ であり，他方では，下男，副官，司祭あるいは教育係という追従者側の ≪fantoche≫ である．さらに，注意すべきことは，これら追従者側の ≪fantoche≫ において，私達は伝統的な登場人物としての ≪confident≫ の面影を認め得るということである．すなわち，彼らは ≪drame≫ の因襲的なタイプである ≪confident satellite≫，あるいは ≪comédie≫ の因襲的なタイプである ≪confident perturbateur≫ の様相を呈していると言えるであろう．前者は Spadille, Quinola, Tibia, Marinonni の場合であり，後者は Blazius, Bridaine, Dame Pluche の場合であり，形式的には主人公に追従する主人公の告白の相手あるいは相談相手である．しかし，Musset が創造した伝統的な ≪confident≫ としての登場人物 ≪fantoche≫ は，あまりに思慮も感情もなく極めて愚鈍であり，伝統的な≪confident≫ が主人公の心情の深い理解者であり，忠実な告白の相手であるのに対して，それら真実の何ものをも理解できない．主人公達の間で継起する劇的事件の局外者さながら無理解故の軽薄さと滑稽味は，主人公達のあまりに複雑微妙な心理，愛の本質についてあるいは愛の不条理について柔和な魂で感知したとも言うべきいわばミューズの対話，それらの持つ詩的イマージュや幻想などと極めて著しい対照をなすのである．主人公と ≪fantoche≫ とのこれ程までに見事に掛け離れた存在，それは伝統的な ≪confident≫ と主人公との間に全く見

られないことであり，フランス演劇史においても Musset のみが創造し得た両者の関係である．以下，主人公との対比にある ≪fantoche≫ の操り人形的要素を考察する．その考察手段として，私は次の二つの手段を設定する．まず，現象面から，つまり彼らの言葉と振舞を通して ≪fantoche≫ の一面を明らかにすること．次に，内在的側面から，つまり彼らの行動の原動力は何であるか，彼らの存在意識は何であるかを明らかにすることである．

まず，きまり文句や最高度の形容詞を持つ ≪fantoche≫ の言葉，文体を通して気付くことは，論理の不在ということである．それは，まさに私達の想像以上のものであり，先の四編の劇のすべての ≪fantoche≫ に共通するものであるが，1例を挙げると，まず，A qoui rêvent les jeunes filles の ≪fantoche≫ Spadille と Quinola においては，いかなる知性も論理もない．たとえば三人の ≪fantoche≫ の次の会話を見よう．

Irus

A-t-on sonné déjà deux coups pour le dîné?

Quinola

Non, l'on n'a pas sonné.

Spadille

Si, si, l'on a sonné.

Irus

Je tremble à chaque instant que le nouveau convive
Qui doit venir dîner ne paraisse et n'arrive.

Spadille

Il faut vous mettre en vert.

Quinola

Il faut vous mettre en gris.

Irus

Dans quel mois sommes-nous?

Spadille

Nous sommes en novembre.

Quinola

En août! en août!

(A quoi rêvent les jeunes fille 第1幕第2場)

すなわち，これはいかなる論理もない矛盾的精神によるもので，明白なる事実の否定にまで至る愚かさであり，こうしたシンメトリーの対話の形式は，滑稽さを増長させるのに極めて効果的であると言えよう．ちなみに，こうしたシンメトリーに基づいた登場人物の処理の仕方は，Musset 独自の演劇美学を持つものであり，主人公側ではもちろんのこと，すなわち，私達には一連の「夜」の詩以来それはなじみ深いものであり，そこでは彼

抒情的，悲劇的テーマとなっているのであるが，端役の ≪fantoche≫ においても，Musset は常に分身を並べる．そして，それら ≪fantoche≫ においてそれは喜劇的テーマとなっているのである．

次に，知性がわずかにある言葉，あるいはある節にしか働くことができず，論理の中絶が実にしばしば起る場合である．その1例として Les Caprices de Marianne の第1幕第8場における Claudio と Tibia との会話を見ることにしよう．

Claudio

..... ma femme est un trésor de pureté. Que te dirai-je de plus? C'est une vertu solide.

Tibia

Vous croyez, Monsieur?

Claudio

peut-elle empêcher qu'on ne chante sous ses croisées?

.....

Tibia

Relativement à quoi?

Claudio

Relativement à ce qu'on chante sous ses croisées.

Tibia

Chanter n'est pas un mal; je fredonne moi-même à tout moment.

Claudio

Mais bien chanter est difficile.

Tibia

Difficile pour vous et pour moi qui, n'ayant pas reçu de voix de la nature, ne l'avons jamais cultivée; mais voyez comme ces acteurs de théâtre s'en tirent habilement.

Claudio

Ces gens-là passent leur vie sur les planches.

Tibia

Combien croyez-vous qu'on puisse donner par an...

Claudio

A qui? à un conseiller?

Tibia

Non, à un chanteur.

Claudio

Je n'en sais rien..... On donne à un conseiller le tiers de ce que vaut ma charge; les archiconseillers ont le double.

Tibia

Si j'étais podestat chez nous, que je fusse marié et que ma femme eût des amants, je les condamnerais moi-même.

Claudio

A combien d'années de galères?

Tibia

A la peine de mort. Une sentence de mort est une chose superbe à lire à haute voix.

Claudio

Ce n'est pas le podestat qui la lit; c'est le greffier.

Tibia

Le greffier de votre tribunal a une jolie femme.

Claudio

Non, c'est le président qui a une jolie femme. J'ai soupé hier avec eux.

Tibia

Le greffier aussi! Le spadassin qui va venir ce soir est l'amant de la femme du greffier.

Claudio

Quel spadassin?

Tibia

Celui que vous avez demandé.

Claudio

Il est inutile qu'il vienne, après ce que je t'ai dit tout à l'heure.

Tibia

A quel sujet?

Claudio

Au sujet de ma femme.

.....

「私の妻は純潔な宝だ」と Claudio は妻の貞節について話し始め，先に第2場で話した剣術使いは呼ぶ必要がないと Tibia に言うつもりであった．ところが，それに続く対話は一言ごとにある語あるいはある節に捕えられて，副次的な考えに迷い込むのである．妻の窓の下で，人が歌を歌うという一件から「上手に歌うのは難しい」とか,「芝居の役者達は上手にやってのける」とか，全く下らないことに注意を払い，というよりある気紛れで偶然話が進められている.「年にどれくらい取るのでしょう……」と Tibia が聞くのに対して,「誰がさ，裁判官かい？」とこれまた，頭の空っぽなつんぼの如き返事をする．そして，裁判官の給料がいくらであるとか，自分が裁判所長であり，妻に愛人がいたら死刑の宣告をするとか，ある言葉，ある節に捕えられながら，それに続く会話は面白いことに全く偶然によって始められた話題に立ち返り，彼らはお互にそのことについて話していた

のであると思い込むことができるということである.「死刑の宣告というのは，大声で読むとすばらしいものでございます」と言う Tibia に対して，Claudio は ≪lire≫ ということに捕えられて,「読むのは，裁判官ではない．書記である」と言う．すると Tibia は≪greffier≫ に捕えられて,「書記は美しい妻を持っている」と言う．そして「書記の妻」ということから，話は偶然，来ることになっている剣術使の件に及ぶ．剣術使のことに話をつけようとしていた Claudio にとって，対話は全く関係のない一連の論理のない馬鹿げた考えによって運ばれ，そして恐ろしくも，それは始めと全く反対の結論を引き起しているのである．すなわち，剣術使は来て無垢なる青年を暗殺させることになった．この不合理は見事であり，馬鹿者は全く恐るべきものである．

こうした論理の不在に基づく ≪fantoche≫ の全くちぐはぐな対話は，彼らが好んで極めて頻繁に用いるきまり文句[2)]や最高度の形容詞[3)]と相まって，≪fantoche≫ の思想の不在を表わしているように思える．すなわち，きまり文句というものは，有効で，しばしば良識に一致する語の形態であるが，同時にどんな思想をも表わさず，思考することの不可能，あるいは拒絶を描く語の形態である．したがって，≪fantoche≫ がこれらを好んで頻繁に使うということ，それは彼らがそれら既成のきまり文句あるいは形容詞の意味に少しも気をとめないで，全く盲目的に使っていることを証明するものであり，≪fantoche≫ の思考することの不可能，思想の不在を表わしていると言えよう．すなわち，こうしたきまり文句や最高度の意味を持つ形容詞の使用，あるいは ≪fantoche≫ のシンメトリーの扱い方と共に，Musset の ≪fantoche≫ は文体のすばらしい成功であったということができるであろう．

次に，こうした論理も思考もない ≪fantoche≫ の行動の原動力は何であろうか？つまり，何に彼らは生きているであろうか？という問題意識のもとで ≪fantoche≫ を考察する時，≪fantoche≫ 特有の共通点に気付く．すなわち，彼らはすべてある執念に生きているということである．例えば，先に例として取り上げた明白な事実の否定にまで至るSpadille と Quinola にあっては，今何月であろうと，何時であろうと構わない．言うなれば，それは自ら存在しないことが絶対的なのである．不存在の存在であることへの偏執なのである．もし，≪fantoche≫ という動物を設定するとすれば，それはやっと原生動物の形を成すことができるものであると言えよう．

さらに，On ne badine pas avec l'amour の男爵は，外見への儀礼への執念のもとで，Camille と Perdican との再会の場面を，切望する結婚の前奏曲として整える．また Blazius と Bridaine とは，おいしいものをたらふく食べ，おいしい酒でぐでんぐでんに酔っぱらうことを切望し，すなわち，本能への執念のもとでその恩恵に与らんとする，さらに Claudio においては，16世紀の欺かれた夫はそのように振舞うので，すなわち，慣例への執念によって妻の恋人らしき者を刺殺させようとする．しかも，妻である Marianne はまだ夫に忠実であるというのに．Claudio は嫉妬など少しも感じていないというのに．

ところで，こうした外見とか儀礼,本能，あるいは慣例への偏執によって生きる ≪fan-

toche≫ の振舞を見る時，私達は彼らがすべて侮辱を受けることに気付くのである．侮辱の前の ≪fantoche≫ の振舞は，彼らの偏執に基づく計画の振舞である．ところで，その計画は Claudio の場合を除いてことごとく失敗に終る．失敗の後の ≪fantoche≫ 程滑稽なものはない．失敗以前の ≪fantoche≫ の計画の時と，失敗後のスキャンダルの時との間の逆転は申し分なく，矛盾は実に滑稽である．例えば，男爵は思いがけない事故が起る度に途方に暮れ，

Je n'y comprends pas absolument rien...

Je vais m'enfermer pour m'abandonner à ma douleur.

と言うことしかできない．すなわち，≪fantoche≫ は突然自分が不条理な世界に投げ出されたように思い込み，もはや，何を理解することも，何にも説明を見い出すこともできず，自分が謎と侮辱に包まれているように思うのである．Mantoue の王子は，失敗の後，

Puisque les majestés divines et humaines sont impitoyablement voilées et lacélées, puisqu'il n'y a plus les notions du bien et du mal.....

(Fantasio 第2幕第6場)

と彼も，不条理の世界に投げ出されたように思い込む．また食堂から追い立てられた Bridaine や Blazius の著しい精神錯乱，彼らもまた不条理の世界に一条の光を求めて叫ぶのである．≪O Sainte Eglise catholique!≫ と Bridaine. ≪O Sainte Université de Paris!≫ とシメトリーに Blazius. 食欲への本能にしか生きることのできない司祭ならざる司祭 Bridaine, 教育者ならざる教育係 Blazius の不合理な叫びなのである．

不条理な世界に投げ出され，何も理解できず，何もすることのできないこうした ≪fantoche≫ の自己存在の意識はいかにして取り戻せるであろうか．何も分らなくなった男爵は，その度に，≪Passons dans mon cabinet, je serai vêtu de noir cet hiver.≫ と言う．すなわち，この≪fantoche≫ の自己存在の意識は，ある対象の中で，ある外見の中でしか見出すことができないのである．自分の書斎の中で盛装した時，はじめて彼は自分の混乱から解き放されるように思うのである．Irus は，彼の名前や衣裳を通してしか存在することができない．彼が人に気に入られたいのは，彼の人物ではなくて彼の衣裳であり，Silvio と自分とを比較して見る時彼が比較するのは，人物ではなくて名前なのである．

Silvio! ce n'est pas mal, —— Silvio! —— le nom est bien; Irus, —— Irus, —— Silvio; —— mais j'aime mieux le mien.

(A quoi rêvent les jeunes filles 第1幕第2場)

すなわち，背書き，名前，衣裳などのこうした外見は，論理も思慮も感情も持たない操り人形の力の及ぶ唯一のものであり，存在するという錯覚を持つことができる唯一のものなのである．

※

以上，私は ≪fantoche≫ という Musset の喜劇の登場人物を把握することを試みたが，Musset が彼と全く反対の人物，彼が軽蔑し，嫌い，遠ざかった人物を彼特異の才能で持って実に巧みに書き上げたということ．しかも，Musset の生涯において最もロマンティックな時期及び作品に登場させたということ．この事実に，私は決して偶然でないもの，Musset の本質から生じた必然なるものを感じるのである．

Musset にとって，この1833年と1834年という年代は，周知の如く George Sand との大恋愛と痛ましい別離の時期である．彼が本当に真剣に生きたのもこの時期であった．というのは，この時期程彼は自己の内に埋蔵されている矛盾を痛々しく見詰めたことはなかったからである．彼の内面には，純粋に愛することを不可能にするその矛盾を克服せんとする激しい戦いがある．すなわち，それはパリッ子の持つ懐疑的な享楽好みと．ロマンティックな理想的な情熱と，18世紀の息子のクラシック精神とによる矛盾である．それらは，一方では Musset に George Sand との真実な愛を抱かせ，他方では放蕩による懐疑を教え，さらに18世紀的分析精神は，これら両者を残酷なまでに見詰め益々 Musset を苦悶させたのである．このような内面の動揺の最も激しかった時期に，Musset は彼自身の投影である愛し悩む傷つき易い魂を持った主人公達を深い理解と愛情とを持って書かずにはいられなかったのであろう．さらに，Musset が生まれながらに持つ品位は，この繊細で傷つき易い魂が押し潰されてしまいそうになるのを本能的に阻止し，自己を守ろうとすることができたのであろう．つまり，傷つくべき感情も思慮も持たない端役の登場人物 ≪fantoche≫ は，外傷に対して無感覚になろうとする Musset の欲求の表明としてその存在を見ることはできないであろうか．その後の作品 —— Musset が自己の全的な直接投影を行なわなくなった作品における ≪fantoche≫ の不存在は，≪fantoche≫ という存在でもって，一方で無感覚になろうとする必要が Musset になくなったことを証明しないであろうか．すなわち，≪fantoche≫ は，Musset 及び彼自身の投影である感受性，知性，才気に溢れた極めて詩的な登場人物との対比によってしか存在し得ないと言えよう．≪fantoche≫ が登場しなくなった作品は，Musset の内面における一面化の時期の作品でもあり，Musset 特有のものである繊細で軽妙洒脱から起る微妙な感動は希薄となり，何かもの足りないものを感じさせられるのである．したがって，端役の登場人物≪fantoche≫ は，決して，Musset の本質ではないが蔑ろにできない存在であり，Musset 研究の重要な鍵の一つとして把握しなくてはならない存在であると思うのである．

〔註〕

1) これは，Musset の兄 Paul de Musset の言葉であり，誠に面白い言葉であるが，Musset の作品はこの「感情の論理」に導かれ，書き上げられ，それは彼の作品の主調をなすものであると説明している．

2) Auguste Brun は，Deux proses de théâtre の中で，これら ≪fantoche≫ のきまり文句を3つに分類している．まず，感情的なきまり文句として，男爵が常に用いる

≪je m'abandonne à ma douleur≫ や，Claudio の台詞 ≪je me sens près à mourir de douleur≫ 等である．次に，判断のきまり文句として，男爵の ≪je connais ces êtres charmants et indéfinissables≫ 等．さらに，叙景のきまり文句として，男爵の ≪Cet ombrage propice≫ 等．

3) 一例として，同じく男爵の台詞を引用しよう．

Ce Blazius sent le vin d'une manière horrible..... .....Ce Blazius a une odeur qui est intolérable ..... quelle insupportable manière de parler ..... Voilà qui est incompréhensible....., cela est insolite..... cela est inouï; c'est absurde .....cela est monstreux.

(on ne badine pas avec l'amour 第2幕第4場)

主要な参考文献

A. Brun ; Deux Proses de Théâtre, Publication des Annales de la Faculté des Lettre Aix-en-Provence. n°6 1954.

R. Mauzi ; Les Fantoches d'Alfred de Musset, Revue d'Histoire Littéraire de la France, Avril-Juin 1966.